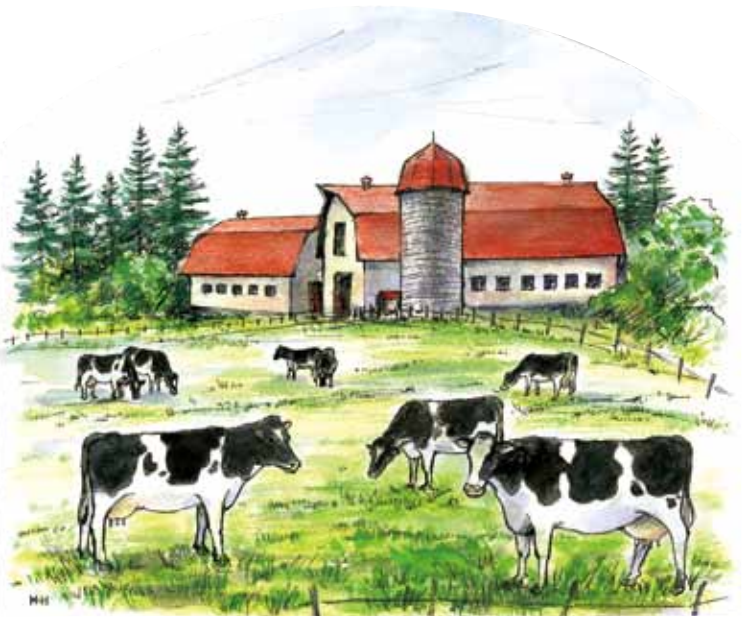
日本酪農の父・宇都宮仙太郎のまぼろし

宇都宮精神とデンマークモデル

安　宅　一　夫



日本酪農の父・宇都宮仙太郎のまぼろし

宇都宮精神とデンマークモデル

序

本年、二〇一七年三月一日は、日本酪農の父、宇都宮仙太郎先生没後七七周年です。三月一日の命日には、先生の功績を顕彰して、北海道酪農の発展に貢献した三名の人に宇都宮賞が贈られ、本年は四九回目を迎えました。ラッキー7が七回目の幸運な年になることを祈ります。

また、本年は宇都宮先生の恩師、アメリカウィスコンシン大学総長ヘンリー博士からデンマークモデルを受け継ぎ、北海道酪農にその真髄を紹介・提唱してからちょうど一一〇年になります。宇都宮先生やその弟子黒澤酉蔵先生を中心としたデンマークモデルの推進者たちの努力によって北海道酪農は短期間で著しく発展しました。北海道酪農は現在も健闘していますが、世界はそれよりも速く変化、発展しています。かつて、我が国の乳牛の個体乳量は、アメリカ、カナダとしのぎを削っていましたが、現在はデンマークが首位に躍り出て、北欧の台頭が目立ち、我が国の順位は後退しています。

宇都宮仙太郎先生爾来、宇都宮精神は「堅忍不抜」です。この精神と田中

正造翁の「辛酸亦入佳境」から、ローマ人の手紙「苦難生忍耐、忍耐生練達、練達生希望」が黒澤酉蔵先生の愛唱聖句になりました。

周年記念の年に当たり、本書が宇都宮仙太郎先生の高い志とそのまぼろしを呼び起こし、若き酪農人の発憤をもたらし、その人生の資となれば幸いに思います。本書の出版に当たり、ご尽力をいただいた酪農学園後援会常務理事永田享氏に感謝申しあげます。

二〇一七年三月一日

宇都宮仙太郎先生生誕一五〇周年、没後七七周年とデンマークモデル一一〇年を覚えて

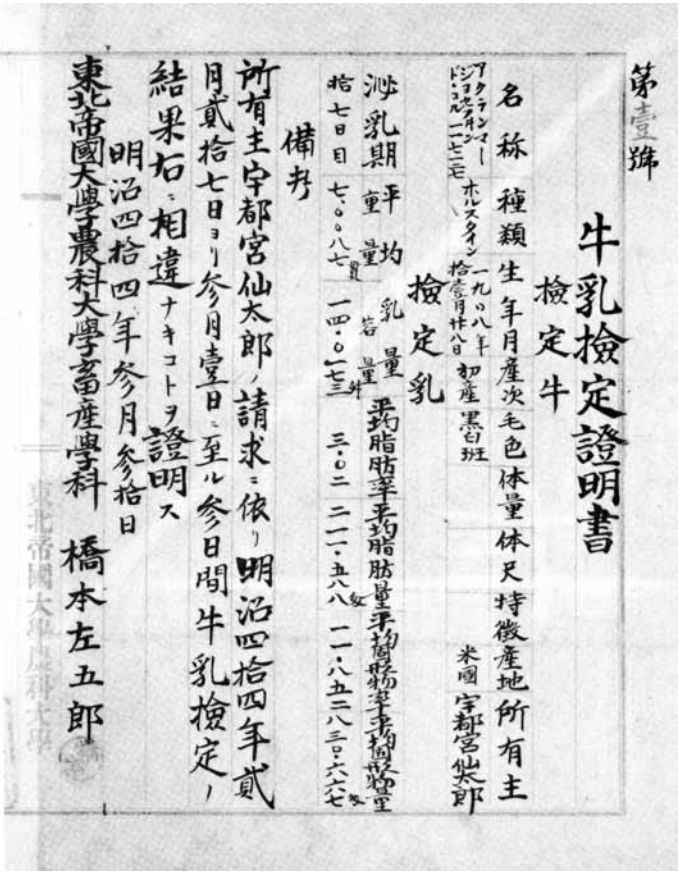
安宅　一夫

宇都宮仙太郎翁とその恩人　宇都宮牧場

宇都宮仙太郎翁の生家　大分県中津市

宇都宮仙太郎翁とその子孫

北海道で初めて栽培されたアルファルファと宇都宮仙太郎翁



第壹號

牛乳檢定證明書

檢定牛

名称　種類　生年月産次　毛色　体量　体尺　特徴　産地　所有主

ブラックランドシヨウ　ホルスタイン　一九〇八年拾壹月廿八日　初産　黑白班　米國　宇都宮仙太郎

檢定乳

泌乳期　平均乳量　乳脂率　平均乳脂量

拾七日目　七〇〇八七瓦　一四〇〇一七三　三〇〇二　二一一〇五八八瓦　一一〇八五三八　三〇六六七瓦

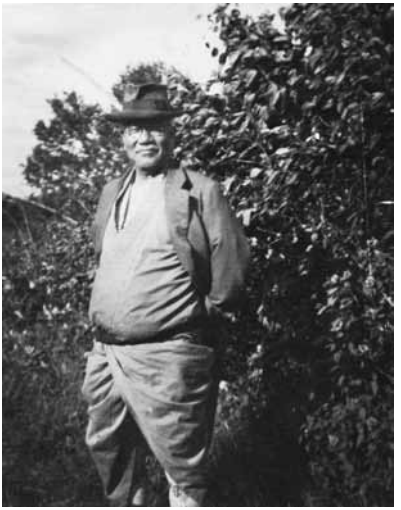
備考

所有主宇都宮仙太郎ノ請求ニ依リ明治四拾四年貳月貳拾七日ヨリ參月壹日ニ至ル參日間牛乳檢定ノ結果右ニ相違ナキコトヲ證明ス

明治四拾四年參月參拾日

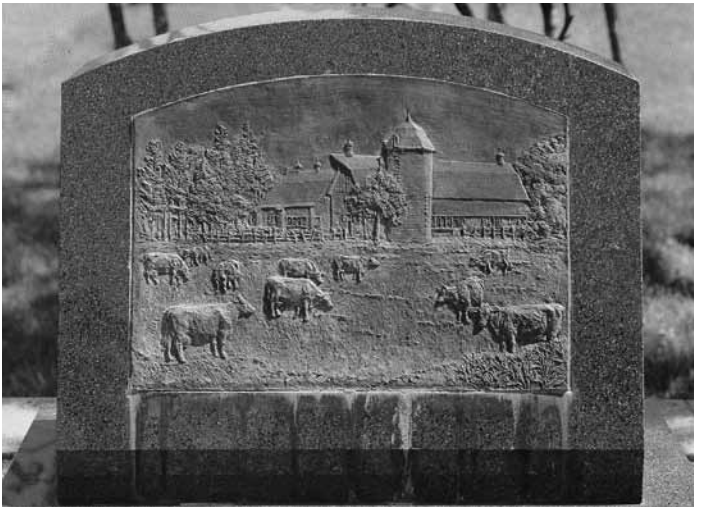
東北帝國大學農科大學畜産學科　橋本左五郎

北海道で最初に発行された牛乳検定証明書



宇都宮仙太郎翁が好んだ姿　上着は背広

「空樽自鳴」碑　大分県中津市



宇都宮仙太郎翁顕彰ブロンズレリーフ　制作　峯　孝 氏

宇都宮賞レリーフと著者

札酪研会報

札幌市南8条西3丁目三六番地
札幌酪農業協同組合内
発行所
札幌酪農研究会
電話（71）0131
（71）0132
発行兼編集人
熊谷泰隆
印刷所
三陽印刷KK

原料に勝る
製品なし

宇都宮精神を偲ぶ

（昭和二七年黒沢勉氏の学んだころの宇都宮牧場）

宇都宮会誕生

北海道酪農の大先達、宇都宮仙太郎翁が逝去されてからすでに二十数年になるが、宇都宮牧場はご令息の勲氏があとを継がれ、その名はわが国有数の牧場として広く世に知られている。

親子二代にわたつて築きあげられたこの牧場に学ぶ実習生は数多く、今日優れた酪農家となつている方も少なくない。そういう実習生が集つて思い出を語らい、堅忍不抜の「宇都宮精神」を呼び起そうという気運が盛り上り、高倉一夫（代表）、黒沢勤、栗栖敏充、福屋修三、榎並博介、木伏五郎、鈴木省三の七氏が発起人となり、黒沢四蔵、町村敬貴両氏を顧問にいただき、道内に居住する約六十名の実習生に呼びかけ、さる二月二十五日、札幌市の豊印ペーラー四階で「宇都宮精神を偲ぶ会」を開いた。

同日の出席者は四十一名、亡き仙太郎翁のこと、宇都宮牧場に流れる翁の精神を語つたが、この会を「宇都宮会」と改め、恒久的に開くことを申し合わせた。会の代表には高倉一夫氏が当たり、木伏五郎氏が世話役連絡をすることになつた。以下同日黒沢勉氏の司会で行なわれた実習生の翁にからむ若き日の思い出話である。

人生の貴重な一頁

黒沢　勉氏挨拶

発起人代表の高倉一夫氏が、折悪しく出席できませんので、代てご挨拶いたします。本会についてはご案内の通りでございます。私ども、それぞれ年代こそ違いますが、いずれも若い時代に宇都宮牧場において酪農を実習したものであります。

実習当時の苦しかつたこと、楽しかつたことなど思い起すだけで懐しいものがあり、そればかりでなく、当時の体験が、技術の上においても、精神の上においても、いかに私どもの人生に役立つているかを考えますと、まことに人生の貴重な一頁であつたとさえ存じています。

そういう人々が、いつか一堂に会して話し合う機会を得たいと常々念願しておりましたが、このたびまことにせん越でございますけれども、私どもが発起人となり、「宇都宮精神を偲ぶ会」を催した次第であります。お集りを願い、実習当時の思い出を語り合い、堅忍不抜の「宇都宮精神」を呼び起し、さらにこれからの人生に資したいと念願しているものであります。それでは諸先輩からいろいろとお話をお伺いしたいと存じます

先般発起人の方からこの催しをおききし非常に良いアイデアだと喜んでいるわけです。組織をつくつて年二回くらい集るようにしてはと申しあげました。

私が宇都宮先生にお世話になつたのは明治三十八年、日露戦争のときでした。どうして先生のところにまいつたかと申しますと、私が数え年二十一才のとき、東京から北海道へ渡る際、北炭の社長であり財界の大立物である井上覚五郎さんとか弁護士の中西六三郎さんとか五、六人の紹介状をふところにして札幌にまいりました。

牛飼い、三つの美点

黒沢　酉蔵氏

当時私は月給取りになるとか、役人には絶対なりたくない、どんな苦労しても自力でやつていきたいと燃えていましたので、前の区長をし北海毎夕新聞（現在の北海道新聞）の社長をしている阿部宇之八さんを訪ねました。新聞社の社長なら世間も広く、いろんな人を知つているだろうと思つたのです。

すると阿部さんは、しばらく私の顔をみており考えていましたがぽんと膝をうち、「そうだ、そうだきみのような変つた人を紹介するなら北海道に二人いる、一人は旭

川の小林直三郎、一人は宇都宮仙太郎で、どちらも牛を飼っている、宇都宮は近いから紹介してあげよう" ――こういうことになったのです。

そこで明治三十八年七月三十一日宇都宮先生を訪ねました。ちょうど先生は一生懸命、落葉松に鉄をいれていましたが、応接室へ通され、「牛を飼うのは、三つの良いことがあるんだ」といわれた。それはなんですかときくと、一つは役人に頭を下げなくてもよい、という。これは面白いことをいうオヤジさんと思いました。なにしろ官吏万能の時代でしたから。

先生は福沢諭吉先生の弟子で、「天は人の上に人を作らず」という名句の通り、人間はみな平等だというの思想をもたれており、しかもアメリカで三年ばかり民主主義を身につけた人ですから、日本の官吏の横柄な人を人とも思わぬ、官尊民卑が大きらいだったのです。

これは私、大共鳴しました。

第二は、「嘘をいわなくともやれる仕事だ」とおっしゃるのです。畑で飼料作物を作ったり、牛の乳をしぼったりしていく、動物や土を相手だから、それに上手をいったりすまいことをいったって余計牛が乳を出すものでない、本当に牛に親切にして飼料を適当にやって愛情をもって接してこそ始めて牛は乳を出すのだ。なにもお世辞いったり、オベンチャラいったりする必要はない、いわんや嘘などいったって相手には通じない――こういうのです。私は、こりやまた面白いと思いました。

第三は「牛乳やバター、チーズは人間の健康に非常に役に立つ、自分にもいいし、人にもいい、国民の体位向上になる仕事だ」というのです。

この三つが私の頭に強く響き、良い仕事だ、弟子にしてくれないかというと、いつでもこいという日のことです。これが先生と私の初対面における問答であったのです。私はここで始めて自分の行く道がわかった、これに一生を打ちこんでやろうという決心ができたわけです。

■資金を貯えてホルスタインを

こうして八月一日宇都宮先生のところに厄介になったのです。私が「天は人の上に人を作らず」という名句の通り、人間はみな平等だという思想をもたれており、しかもアメリカで三年ばかり民主主義を身につけた人ですから、日本の官吏の横柄な人を人とも思わぬ、官尊民卑が大きらいだったのです。

これは私、大共鳴しました。

第二は、「嘘をいわなくともやれる仕事だ」とおっしゃるのです。畑で飼料作物を作ったり、牛の乳をしぼったりしていく、動物や土を相手だから、それに上手をいったりすまいことをいったって余計牛が乳を出すものでない、本当に牛に親切にして飼料を適当にやって愛情をもって接してこそ始めて牛は乳を出すのだ。なにもお世辞いったり、オベンチャラいったりする必要はない、いわんや嘘などいったって相手には通じない――こういうのです。私は、こりやまた面白いと思いました。

第三は「牛乳やバター、チーズは人間の健康に非常に役に立つ、自分にもいいし、人にもいい、国民の体位向上になる仕事だ」というのです。

この三つが私の頭に強く響き、良い仕事だ、弟子にしてくれないかというと、いつでもこいという日のことです。これが先生と私の初対面における問答であったのです。私はここで始めて自分の行く道がわかった、これに一生を打ちこんでやろうという決心ができたわけです。

当時サイロは四角の木のサイロで、つめこむにはデントコーンを押し切りできって筵で運ぶという時代でした。いまそんなことをいうと嘘みたいな話ですが、それでもそれが最も新しいやり方だったのです。サイロなんか、見たことも聞いたこともない時代でしたからカッターの入ったのは二年後でした。

私の入った時期は、勤さんが生れてから三カ月くらいでした。いまのように女中をおいていませんし、奥さんの英子夫人は勤さんを育てながら、バターの上書を書いたり、とても忙しかったので、勤さんをお守りしたものです。ときどきオシッコをかけられたものです。(笑い)

その頃は宇都宮先生の苦難時代で、非常な努力をしていました。そこでいまでも思いだすのですが宇都宮さんという人は、アメリカに三年もおり、ウイスコンシン大学の先生の教えをうけたり、アメリカ流のトップクラスの酪農をみたり学んできた人ですから、ホルスタインの純粋牛をよく知っており、おそらく外国から帰ってきてもなんとかしてホルスタインを入れたいとしたのが、ねてもさめても考えていたと思うのですね。

ところが、それをじつと辛棒して、雑種牛から掲り努力していたのです。時々私たちにも、アメリカへ行ってホルスタインを買ってきたいともらしていました。いまのように道庁で補助を出すわけもないし、金融機関が融資する道もない時代で、自分の力で努力し金をためて買いにいく以外に方法がなかったのです。

そう思いながら十二、三年間もじつと辛棒し、着々と自分の力を養い、ようやく無理をせずに外国へ行き純粋牛をかいにいったのです。ここが事業家の非常に学ぶことだと思うのです。

私どもは月末に、小遣銭を一円五十銭から二円もらうのですが、これだって宇都宮さんにしてみたら容易なことでなかったのです。しかし非常な努力をし、自分の力に応じて牛を輸入したのです。早くから牛を入れたいのは切なるものがあったでしょうが、それを何年も何年も辛棒し、まず力を貯えたということは、われわれも学ぶべきです。

この頃あまり世の中が便利になって、金をかすところはあるし、少しうまい計画をもっていくと政府も貸してくれます。ややもすると無理をしたがる、成功を急ぐため失敗することが多いのです。

■実践躬行の人

とにかく先生は実によく働きました。朝起きてみると、牛が全部牛舎に入っておる。夏は夜、外へ出しておき、夜中雨がふる場合があれば、先生は奥さんと二人で牛舎に入れてしまう。牧夫は一人も起きない。われわれが眼をこすりながらいくと、牛舎に入っている――こんな具合でした。細い心づかいをしているのです。

二宮尊徳先生の「人を起す場合には自ら起きよ、寝ていて人を起こすようでは、だめだ」という金言を実行していたのです。

私はそうながい期間ではありませんでしたけれども、いろいろな点で教えられるわけであります。宇都宮牧場で酪農の技術、たとえば牛の飼い方、乳の搾り方、畑の起し方などを学んだのは、もちろんありがたいことでしたが、精神的な面で尊い教えを受けたことを忘れることができません。その教えも説教ではない、言葉ではない自分自らが実行して他に示すということであります。実践躬行という範をたれたのであります。

まだ教えられたことは数限りなくありますが、二、三を申しあげたのであります。

思い出を語るのは黒沢西蔵氏

皆さんこんにちは。日ごろ、酪農学園に対しまして、ご指導いただきありがとうございます。今日は酪農学園の創立者達のまぼろしを話すということですが、私の担当は、宇都宮仙太郎先生です。ご承知のように、宇都宮仙太郎先生は酪農学園の創立者黒澤酉蔵先生の人生において、田中正造翁とともに最も影響を受けた恩人の一人であります。多くの人は、宇都宮仙太郎先生のことを宇都宮仙太郎翁と呼びますが、私は尊敬の念を込めて仙太郎先生と呼ばせていただきます。仙太郎先生は、一九四〇年に召天されましたので、私は先生にお会いすることができませんでした。生まれてくるのが遅くて残念でした。先輩の方々に仙太郎先生のことをお聞きしましたが、先生は本当に親しみのもてる頼りがいのある親方のような人だと皆さん言っております。私も、仙太郎先生を非常に魅力のある人として尊敬しております。

『町村敬貴と町村農場　北海道牛つくり一二五年』という本を町村末吉さんからいただきました。この本に「三人の先覚者」というタイトルで仙太郎先生のことが書かれております。元理事長の遊佐孝五先生からは『酪農学園の歴史と使命』を座右の本として常に勉強するように言われていますが、こ

こには酪農学園創立者とその恩師仙太郎先生との出会いと入門、これによる恩沢が述べられています。仙太郎先生について最も詳しい本は、酉蔵先生が書いた『宇都宮仙太郎』とご子息の宇都宮勤さんが出版した『空樽自鳴　宇都宮仙太郎』です。これらの本を読んでにわか勉強して、お話をさせていただきます。

一．生い立ち

宇都宮仙太郎先生は、慶応二年（一八六六）四月一四日に豊前国下毛郡大幡村（現大分県中津市）の養蚕農家武原文平、母ヤスの二男として生まれ、後に母方の縁故先である宇都宮武平の養嗣子となりました。なお、仙太郎先生の生家に伝わる系図では仙二郎と名づけられましたが、戸籍簿に誤って仙太郎と記入され、それが本名になったと言われています。少年時代は、当初小学校がなかったので同郷の先輩である賀來素吉に論語や十八史略などを学びましたが、賀来先生は熱心なキリスト者であり、その感化を受けました。また、仙太郎先生は福澤諭吉先生の教えを直接受けたことはありませんが、

その著書をよく読み、福澤先生の教えである実学を重んじ、独立自尊を信条としました。

二．大臣を夢みて

明治一〇年に村に初めて小学校ができたのでそこで一年間学んだ後、中学校に進学しましたが、明治一五年五月に政治家を志望して上京し、東京神田の共立学校に入学します。この学校は、当時帝国大学の予備校で千人位の生徒がおり、周りの学校も含めて政治家希望の生徒が数千人もいることが分かり、政治家になることをあきらめました。その頃体の弱かった仙太郎先生は、下宿屋の隣の牛乳屋に牛乳を飲むように言われていましたが、ある日、後に外務大臣になる青木周蔵の弟が営む牛乳屋を目にし、畜産業が今後必要になるのではないかと思うようになりました。このことで福澤先生に相談すると、エドウィン・ダンが北海道に牧場をつくったので、まずそこに行きなさい。そしてそのあとで本場アメリカに行くよう指導されたといわれています。

三．酪農を志す

明治一八年（一八八五）八月、仙太郎先生は一九歳のとき、北海道に渡ります。ちょうどこの年に黒澤酉蔵先生が生まれています。札幌農学校二期生の町村金弥さんが場長を務める牧場（真駒内牧牛場）に行きますが、簡単に雇ってもらえなかったようです。一説によれば、三日三晩、牧牛場の門前に座り込んだそうです。そして、しょんぼりして帰るところを金弥夫人がかわいそうに思って助けてくれて臨時で雇ってくれたというエピソードがあります。そこで一生懸命働き、勉強もしました。あるとき図書館で外国の文献などをみて、やっぱり本場アメリカに行きたいと思うようになります。当時、仙太郎先生は、牛の糞と尿で石狩川を濁らせたいと考えていました。とんでもない話ですが、けた外れにスケールの大きな夢を持ち、牛をたくさん飼ってその糞尿で石狩川を汚すくらい酪農を発展させたいと思っていたのだと思います。そして、明治二〇年四月にアメリカに渡りました。

四．アメリカ酪農に学ぶ

アメリカでは最初ワシントン州のデビス牧場で働き、ここで初めてホルスタインを見て、アメリカに来た甲斐があったと感激します。しかし、やはり酪農の本場は東の方だということで次にイリノイ州のガラー牧場という当時アメリカで一、二の大きな牧場に移りました。そこでバターやチーズの製造技術も身につけました。仙太郎先生は勉強家であったのでいろいろな本を読み、とくに「ホーズデーリィマン」という有名な酪農雑誌を愛読しました。今でもありますが、アメリカの酪農家をはじめ我々関係者も読んでいる雑誌です。この雑誌は一八八五年創刊ですので、先生が渡米する二年前に出た雑誌です。こういう雑誌や本を読みながら酪農の情勢や技術を勉強したのです。さらに最先端の酪農の勉強をするためウィスコンシン大学のヘンリー博士のところに行きました。ヘンリー博士は、家畜栄養学と飼料学の教授で、全米で最も人気がある農学部長でしたが、当時は試験場の場長を兼務していました。同じく試験場の副場長はバブコック博士でした。バブコック博士は牛乳の脂肪検定器を開発した人です。非常に簡単な器具で、私達も学生時代にはそれで

乳脂肪率を測定しており、最近まで公定法として採用されていました。当時アメリカでは牛乳の価格取引が単なる容量あるいは重量から乳脂肪に代わる時期でした。また、大学にはキング式牛舎で有名なキング博士もいました。アメリカ酪農が急速に発展する時代に全米でも超一流の先生のもとで働き、勉強もしましたが、特にヘンリー先生のもとでサイレージや飼料の研究を熱心に手伝いました。初めてトウモロコシサイレージの調製作業に参加したとき、当時は土を掘って、その中に切断したトウモロコシを埋めていましたが、こんなことをしたら全部腐ってしまうのではないかと思ったようです。一か月後サイロの蓋を開けると見事に発酵したサイレージができていたのでびっくりしたと述べています。私も三〇数年前にトウモロコシサイレージを初めて見て、変なものを牛が食べているなと思ったことがありますが、その八〇年も前に仙太郎先生はサイレージを見て驚いたのです。今では都会の子供でもサイレージを見て驚く子はいないでしょう。また、あるときサイレージ調製の競争をしたとき、仙太郎先生は、誰よりも素早く刈取り、そして素早く詰め込みました。その結果、サイロを開けてみると仙太郎先生が作ったサイ

レージが最もよくできており、その技術と勤勉さが高く評価されました。アメリカでのサイレージとの出会いと経験は、後に北海道でサイレージを普及するきっかけになりました。ウィスコンシン大学におけるもう一つの大きな収穫はウィスコンシン大学のショートコースの学生として勉強できたことです。このコースは冬の間、約三〇人の酪農家子弟を対象に三か月間合宿してみっちり教えるもので大学の重要な役割を果たしていました、また、このコースは、一八八五年に開設され、現在も継続されていますが、仙太郎先生は日本人最初の学生となり、その後、乳牛の神様と呼ばれた町村敬貴さんが続き、戦後は本学卒業生で名門牧場出身の山田実さんや宇都宮治さんも牧場実習をしながら、ここで学びました。酪農学園の短大に第Ⅱコースというのがありましたが、そのモデルは、ウィスコンシン大学のショートコースにありました。本学の第Ⅱコースは文部省に認められませんでしたが、実学と人間教育を実践する季節制大学として日本の農業教育史上輝かしい成果をもたらしました。

こうして、アメリカで現場の仕事、実習と研修をほぼマスターして三年後帰国します。

五．待望の牧場経営、研究と指導

「独立自尊」、つまり、小さくても自分の牧場を持って一人前ということで、札幌で牧場経営を開始します。北海道では最初の民間によるバター製造も手がけました。ウィスコンシン大学の恩師のヘンリー博士は、飼料学が専門で、アメリカで乳牛の飼料としてサイレージを定着させる基礎を作りました。ヨーロッパでは穴を掘ってサイレージを作っていましたが、ヘンリー博士やアメリカの研究者は地上式塔型サイロを開発します。アメリカ帰りの仙太郎先生は、本場仕込みのサイレージ技術を普及し、我が国で初めて地上式塔型サイロも作りました。また、サッポロビールからでるビール粕の飼料としての利用に着目し、牛飼い仲間で払い下げを受けます。一八九二年に仙太郎先生が代表になり、その仲間と「札幌牛乳搾取業組合」をつくり、毎月四日に集まり、カレーライスを食べながら、ビール粕代金の精算と勉強会を行いました。この組合は、毎月四日に集まることから、四日会とも呼ばれ、日本で最も古い、ハイカラな酪農組合でした。仙太郎先生は、大豆粕、綿実粕、ビートパルプなど食品副産物の飼料利用を行いました。今でいうエコフィードの利用を我が国で最

初に行い、日本中に普及させました。このことは大変画期的なことでした。

ヘンリー博士は、一八九八年に飼料学のバイブルと言われる『フィードアンドフィーディング』を出版し、世界に家畜栄養学と飼料学の知識を広めましたが、仙太郎先生の弟子になった黒澤酉蔵先生は仕事の合間にこの本を読んで勉強したといわれています。この本の著者は、ヘンリー博士の死後、コーネル大学に移った後輩のモリソン博士に受け継がれます。私も平成元年に酪農学園からコーネル大学畜産学科に留学し、乳牛栄養学の勉強をする機会をいただきましたが、そのときヘンリー博士がコーネル大学出身であることを知りました。また、コーネル大学畜産学科の建物はモリソンホールと呼ばれ、壁には大きなモリソン博士の写真が掲げられています。このようなことから、家畜飼料学を専門とし、サイレージの研究一筋の私にとって、ヘンリー博士と仙太郎先生は親しみのある敬愛する人になりました。

仙太郎先生のもう一つの功績は、食生活の改善指導を熱心にされたことです。作物をただ生産する、乳肉を生産するというだけでなく、それをどういう風に食べるかという生活の面も重要です。そのため本学の短期大学には生

活科学コースもありました。また、来年から大学食品科学科に管理栄養士専攻を設けますが、そのルーツは仙太郎先生にあります。

六．黒澤酉蔵の弟子入りと酪農三徳

一九〇五年、黒澤酉蔵先生が二〇歳のとき、北海道に渡ってきました。仙太郎先生が北海道に渡ってきたちょうど二〇年後です。年齢も状況も似ています。北海道の言論界で有名であった北海道毎夕新聞（現在の北海道新聞）社長の阿部宇之八さんに紹介されて仙太郎先生のところに来るわけですが、その時言われた有名な言葉が「酪農三徳」です。つまり、酪農には、「役人に頭を下げなくてよい」、「嘘をつかなくてもよい」、「牛乳は人々を健康にする」という三つの徳があるというのです。酉蔵先生はこれを聞いて、「これだ、これは一生かけてやる仕事だ、私の一生を酪農に捧げるのだといっぺんに決心した」と述べています。この酪農三徳、とくに最初の「役人に頭を下げなくてよい」という言葉に一番感銘したようです。ところで、仙太郎先生は簡単に雇ってもらえなかったことはすでにお話ししましたが、酉蔵先生の場合

は、すぐに「よしわかった」というような感じで仙太郎先生の弟子になれたようです。これが、日本酪農の大恩人である二人の劇的な出会いです。

仙太郎先生の教えを受けた西蔵先生と町村敬貴さんは、酪農において土つくりの重要性をそれぞれ次のように提唱しています。まず西蔵先生は、「良牛は良草より、良草は健土より、健土は家畜より、健民は健土より、健土は愛土より、循環進展無窮也」と述べ、敬貴さんは、「土づくり、草づくり、牛づくり」を生涯のテーマとしました。この二人の考えのもとになった仙太郎先生の「最高の痩せ地が最高の肥沃地へ」という言葉には含蓄があります。酪農を経営する場合、土地の良し悪しよりも土地の立地条件が重要であるということです。つまり、消費地、消費者の近いところに立地しなさいということです。土地はどうにでもなる、改良することができることを意味しています。昔、札幌の土地は非常に痩せていましたが、牛の糞尿や堆肥を入れて肥沃な土地になり、作物がたくさん取れるようになりました。また、ビートなども作り、ビートパルプは牛に給与し、副産物を循環させる日本型循環農業を早くから実践しました。

七．ホルスタインの導入とデンマークモデルの啓蒙

明治三九年（一九〇六）一二月、仙太郎先生は再び渡米しました。四日会の仲間と「ホーズデーリィマン」を読んでいると多数のホルスタインの売り物広告が出ており、この際北海道の乳牛改良のため自分たちでアメリカから純粋のホルスタインを輸入しようということになり、同業の吉田善助さんが同行しました。目的はホルスタインの買い付けでしたが、ウィスコンシン大学に二か月滞在し、チーズ製造の授業を受けるとともに農民のための短期講座（ファーマーコース）に出席し、乳牛の審査などについて学びました。このコースの開会中に仙太郎先生はウィスコンシン州農業組合の名誉会員に推薦されるといううれしいハプニングがありました。そして、約半年後の明治四〇年六月、五〇余頭のアメリカの牛を輸入して帰国しました。牛の選定方針は、種牡牛は体格よりも血統に重きを置き、牝牛の購入は反対に血統よりも体格に重きを置きました。当時北海道ではエアシャーが推奨品種とされており、ホルスタインは明治二二年に札幌農学校に数頭の牝牛が輸入されてから途絶えておりました。仙太郎先生によるアメリカからのホルスタイン輸入

は日本の乳牛改良大発展の基礎をなしました。アメリカからのもう一つのお土産は、デンマークモデルです。仙太郎先生がウィスコンシン大学の恩師ヘンリー博士を訪問したとき、ヘンリー博士がちょうど退官するときでした。全米一の大学の総長（農学部長）で、全米で最も人気のある先生でしたので、千人以上の酪農民が集まり、退官記念講演会が盛大に開催されました。そこでヘンリー博士は、「アメリカの農業はこのままでは悪くなる、デンマークを見倣え」と声涙下る講演で聴衆に深い感銘を与えました。仙太郎先生もヘンリー博士のことばに感動し、帰国後弟子の酉蔵先生らに北海道もデンマーク農業を模範にしようと提案しました。

その影響で酉蔵先生も次第にデンマークに心酔していきます。そしてデンマークモデルは、関東大震災によって一気に覚醒します。大正一二年（一九二三）九月に起こった未曾有の関東大震災は、我が国の経済に大きな打撃を与え、酪農界も恐慌状態になりました。震災の惨状が世界に伝えられると救援物資として多量の練乳がアメリカから送られ、政府は、生活必需品の価格暴騰を防ぐため、その関税を撤廃しました。これによって牛乳の価格

が低下し、酪農家の経営が脅かされ、翌年元通りの関税率になりましたが、酪農界への打撃は思いのほか甚大で、不況はますます深刻になりました。そのとき、酪農界の困難を克服し、新生面を打開したのがデンマーク心酔者であるといわれた仙太郎先生や酉蔵先生たちです。デンマークモデルを研究するため彼らが設立していた北海道畜牛研究会は、大正一四年（一九二五）に第一回畜牛家協議会を開催し、酪農民の厳しい局面の打開策について協議しました。なお、研究会や協議会のタイトルにありますように当時は酪農とか酪農家という言葉はまだありませんでしたが、とにかく、酪農家が牛乳をそのまま販売するだけでは、酪農は振興しない。この際、クリームやバター、チーズを生産する組合製酪事業を開始すべきという意見が大勢を占め、有限責任北海道製酪販売組合をつくり、仙太郎先生が組合長、酉蔵先生が専務、佐藤善七さんが常務になりました。今でいう、農業の六次産業化の先駆けであり、デンマークモデルの「酪農民のための酪農民が経営する酪農民の組合」の誕生でした。この時、今の一元集荷多元販売が始まりました。翌年この組合は連合会（酪連）になり、戦後は雪印乳業株式会社に変わります。

八．もう一つのデンマークモデル、北海道酪農義塾

農民の組合事業である酪連の誕生に当たり、仙太郎先生はデンマークモデルによる精神的動機を強調しています。このことは、次のように『酪連一〇年史』の冒頭に紹介されています。

「丁抹農業の発達の原因を考えてみまするに、多々ありますが、その最も大切な事は「農業の事は農民が」という精神に帰します。私の崇拝する福澤先生は之を「独立自尊」と称えて我国明治大正の実業家の精神を作られました。この精神こそ北海道農業進歩の原動力でありまして之なくんば千百の奨励施設も空であります。この精神はやがて組合の発達を促し農業技術及農政の自主的改革を誘導し、独立の一農民として社会国家人として俯仰天地に愧じず、悠々として生活を楽しむ底の力ある農民を作りだすことが出来ます。私は此の如き時代の来らん事を熱望し又来らん為に努力しつつある次第であります。どうか諸君も「農業の事は農民が」の精神を以て今後の新農業時代の現出に努力せられんことを希望して止まない次第であります。」

一方、仙太郎先生は、それより少し前にデンマーク農業を研究するため娘

の琴子（二女）さんと婿の出納陽一（後に酪農学園大学教授）先生を夫婦でデンマークに留学させますが、出納先生によると、デンマーク農業が発達した理由は、第一は教育であり、第二は組合組織の発達、第三は国が独立農民を作ったことだとしています。私は、出納先生と面識がありませんが、私の研究室の初代の教授で、グルンドビーの三愛精神を紹介するとともに我が国で最初の集約放牧を実践しました。

仙太郎先生とともにデンマークモデルの推進者の酉蔵先生は、「農民の自覚を高め、腕を上達させるためには教育だ、教育以外にない」として製酪事業とともに教育事業が必要であると考え、酪連による学校建設を主張しました。これに対し、仙太郎先生は酪農の研究や普及には卓越した貢献をしましたが、学校教育には消極的あるいは反対でした。仙太郎先生と酉蔵先生に詳しい浅田英祺さんによると、仙太郎先生は、「あの福澤先生や大隈公ですら苦労するくらいの大仕事で、並大抵の事では済まない。学校を作るという事、教育は大変な事だからやるのはどんなものかな」と言われましたが、酉蔵先生は「だからこそ農民のためにやらなくてはと思います」と言ったようです。

そして、何度も何度も頼んでようやく「よしわかった」ということになって北海道酪農義塾が誕生したのです。

デンマークから招いたラーセンさんが「あなたの国では帝国大学農学部があるのにどうして農民はこのような生活をしているのか、何としても疑問がある」とたずねたところ、出納先生は「デンマークでは別に大袈裟なことはやっていませんよ、しかしながら日本以上の成績を出しています」と、答えたそうです。「日本の場合は教育の知的水準は非常に高いんですが、成果が出ていないということであります。日本の教育は知に偏っていて実際を忘れているということです。それで、魂の抜けた雑兵が沢山いても、戦争に勝てません」、そういって酉蔵先生は、腕と心のしっかりした若い青年をつくろう、本物の教育をしようとして酪農学園を作ったのです。先ほど福澤先生と大隈先生の話がありましたが、ご承知のように、福澤先生は慶応義塾大学の創立者ですし、大隈先生は早稲田大学の創立者です。福澤先生は仙太郎先生の先生であり、大隈先生は、酉蔵先生の先生の田中正造翁の友人であり、そういう関係で慶応、早稲田を目標にしたようです。一方、仙太郎先生はアメ

リカのウィスコンシン大学で勉強しましたけれども、ウィスコンシン大学は当時アメリカでトップの大学です。そういう大学を実際見ているわけですから、これは大変だよというわけです。私は、仙太郎先生のまぼろしというか、ロマンを実現するという意味で酪農学園を世界に伍するような大学、日本の慶応、早稲田並みに早くしたいと思います。北海道の政治、経済は大変行き詰っています。子供の数も少なくなって大学では学生を確保するのも大変難しくなってきています。北海道の進学率は本州に比べて非常に少なく、全国平均の約五〇％より一〇ポイントも低い状態です。北海道は、それだけハンディキャップがあるわけです。北海道の大学を活性化することが北海道の経済とか、北海道そのものの活性化につながると思っています。

教育で大事なものは、施設や先生よりも建学の精神だと思います。酪農学園には、仙太郎先生や西蔵先生によって与えられた「三愛精神」と「健土健民」という誇るべき建学の精神があります。その立派な建学の精神、魂をもって初期の先生方や学生は頑張って今日の酪農学園を築いてくれました。

しかし、それだけではなかなか学生を惹きつけることが出来ないというこ

とで、見えるもの、形あるものを良くして学生を惹きつけようとして、北海道では最初のハイテクリサーチセンター事業で日本一の大学農場を建設しました。ロボット搾乳牛舎やデンマークモデルのバイオガスプラントが先日完成したところです。若者に夢を与える農場を、そして老人や子供たちに来ていただいて酪農のことを勉強していただきたい、という思いを込めて新しい農場を作りました。

九．宇都宮精神「堅忍不抜」と「空樽自鳴」

最後に仙太郎先生のパーソナリティについて述べたいと思います。私たちが見倣うところは堅忍不抜、勤勉、達識重厚・不言実行、そして在野精神です。

仙太郎先生爾来の宇都宮精神は「堅忍不抜」であります。宇都宮牧場門下の最優等生の黒澤勉さんによると先生は、晩年「空樽自鳴」という言葉を好んで使いました。福澤先生の「独立自尊」を座右の言葉としていましたが、先生の人生集大成のオリジナルの言葉としてそれにとって代わりました。病気で半身不随になりましたが、友人に頼まれて左手で揮毫した文字が残され、生まれ故

郷の中津市の公園にある顕彰碑にもその文字が刻まれています。その意味は、中身が空っぽの奴ほどわめきたてるとも読み取れますが、書いた本人自体がよくわからないと言っております。息子の勤さんは、「人は自分をむなしゅうしてこそ他者を説き得る」という犠牲の精神とかキリスト教の精神にもとづく信念を意味する言葉であると言っています。将に「空樽自鳴」です。ぜひこの先生に会ってみたかったなあ、と思っております。先生のことをもっと勉強して、これを参考に酪農学園を生かしていきたいと思います。ありがとうございました。

本書は、二〇〇〇年一一月二四日、酪農学園短大五〇年・大学四〇周年記念シンポジウム「酪農学園創立者たちのまぼろしから」において講演した内容に一部加筆したものです。本シンポジウムを計画・実行された記念事業実行委員会実行委員長篠原功先生の熱意と努力に感謝申し上げます。

第45回宇都宮賞表彰式におけるお礼のことば

本日は、名誉ある宇都宮賞をいただき、感謝と感激でいっぱいでございます。本当にありがとうございました。

選考いただきました宇都宮仙太郎翁顕彰会の北良治理事長はじめ関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。また、推薦いただきました江別市並びに江別酪農振興会の皆様に感謝いたします。

私は、宇都宮仙太郎翁の一番弟子であります黒澤酉蔵先生が創立した酪農学園大学におきまして、宇都宮仙太郎翁と黒澤先生の精神をよりどころにして、堅忍不抜、ひたすら酪農の教育と研究に専念してまいりました。この間多くの皆様にお世話になり、厚く御礼申し上げます。

なかでも、北海道酪農界の大御所であります、黒澤信次郎様、町村末吉様、黒澤勉様、宇都宮潤様、金川幹司様そして天におられる福屋脩三様、恩師の大原久友先生、遊佐孝五先生、そして原田勇先生と上司の楢崎昇先生には酪農の真髄と人つくりの重要性を教えていただきました。また、細田治憲様、

河野崇冶様、山口晴久様はじめ多くの酪農家の皆様には酪農の実際を親切に教えていただきました。また、酪農を通して世界に多くの友人を作ることもできました。その一人である中国内蒙古大学の朝格図教授が本日この会場にお祝いに駆けつけてくれました。ありがとうございました。

宇都宮仙太郎翁にはたくさんの功績がありますが、私が最も強く影響を受けましたのは、アメリカウィスコンシン大学におきまして、ヘンリー教授はじめ超一流の教授の下で当時世界最高峰の酪農の理論と実際を学び、それを日本に持ち帰り普及したことと、デンマークモデルを提唱されたことであります。

仙太郎翁を指導したヘンリー教授は家畜飼料学が専門で、全米ナンバーワンの教授でしたが、酪農家の信頼も厚く、最も人気がある教授でした。私も家畜飼料学が専門でしたので、ヘンリー教授のようになりたいと思っていました。そして、第二の宇都宮仙太郎を作りたいと思っていました。私の弟子が、宇都宮賞を受賞するのを楽しみにしています。

仙太郎翁の一番弟子、黒澤酉蔵先生が創った酪農学園は、宇都宮精神を受

け継ぎ、デンマークをモデルにして、今年八〇周年を迎えます。どうぞこれからもご支援賜りますようお願い申し上げます。

最後に宇都宮仙太郎翁顕彰会のますますのご発展と皆様のご多幸、ご健勝をお祈りいたしましてお礼の言葉といたします。本日は誠にありがとうございました。

二〇一三年三月一日

安宅　一夫

著者プロフィール

安宅　一夫　酪農学園大学名誉教授。1947年、北海道壮瞥町の農家長男として生まれる。帯広畜産大学大学院修了。農学博士（東北大学）。酪農学園大学助手、講師、助教授、教授を経て現職。酪農学園大学酪農学部長、同学長、同短期大学部学長を歴任。専門は、乳牛の栄養と飼料、特にサイレージの発酵制御に関する研究。日本草地学会賞、畜産技術協会賞、宇都宮賞を受賞。アメリカ・コーネル大学客員准教授、中国･内蒙古大学客座教授、内蒙古民族大学名誉教授、新疆農業大学客座教授を歴任。著書には、『最新サイレージバイブル』、『フォレージバイブル』、『日本酪農の展望』などがある。

宇都宮仙太郎のまぼろし

2017年3月1日発行

著者　安宅　一夫

発行　公益財団法人　酪農学園後援会

〒069-8501北海道江別市文京台緑町582番地

電話　011－386－1195

印刷　社会福祉法人　北海道リハビリー

〒061-1195　北海道北広島市西の里507番地１

電話　011－375－2116（代）

表紙／日本画家　袴田睦美

宮崎駿工房